

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370351

研究課題名(和文) フランス古典悲劇における「歴史」の詩学

研究課題名(英文) Poetics of history in French Classical Tragedy

研究代表者

永盛 克也 (Nagamori, Katsuya)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10324716

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：人文主義の成果としての翻訳や概説書などが、フランス17世紀の悲劇作品の受容の条件である歴史的教養を形成する素地となっていたことを明らかにした上で、真実らしさの概念をめぐる、フィクションと史実の混交という問題について、小説と悲劇という異なるジャンルにおいて相似の議論が展開されていたことを示した。さらに、古典悲劇と歴史小説というジャンルの成立期に歴史的教養が果たした役割を検証し、人物の内面を精密に分析するモラリスト的傾向を指摘するとともに、ロマネスク悲劇と歴史悲劇の位相の違いを、英雄小説と歴史小説の差異と比較することにより、より広い文化的文脈において説明した。

研究成果の概要(英文)：The reception of French Classical Tragedy was conditioned by the Historical Culture provided by the Humanistic Studies. The concept of verisimilitude was the subject of much debate about Novel as well as about Tragedy, in reference to the question of mingling Fiction with Historical facts. The Historical Culture played an important role in the definition of Classical Tragedy and of Historical Novel, particularly in their moralistic tendency of psychological analysis, and in their attempt to distinguish themselves from romanesque tragedy and from baroque novel.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス古典悲劇 歴史 人文主義 歴史小説 フィクション モラリスト

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 人文主義の歴史観

フランス 16 世紀の人文主義者たちは「生の教師としての歴史」*historia magistra vitae* に政治的・道徳的指針を求め、「エグゼンプラ」(模範、範例)の宝庫として古代ローマ史に関心をよせた(アミヨ訳のプルタルコス『対比列伝』はその代表例である)。16 世紀後半の人文主義悲劇が多くローマ史に題材を求めた背景にはこのような歴史観があると考えられる。この問題については、次の研究書が参考になる。Beatrice Guion, *Du bon usage de l'histoire. Histoire, morale et politique a l'age classique* (2008)。

この傾向は 17 世紀にも受け継がれ、「ローマ悲劇」*la tragedie romaine* は 17 世紀悲劇の大きな流れを形成するにいたる。この「歴史悲劇」*la tragedie historique* の地位の確立の背景には、ゲ・ド・バルザックが 1630 年代に発表した一連のローマ人論の影響があるのではないかと考えられる。この問題については、次の研究書が参考になる。F. E. Sutcliffe, *Guez de Balzac et son temps. Litterature et politique* (1959); Jean Jehasse, *Guez de Balzac et le genie romain 1597-1654* (1977)。いずれもバルザックと同時代の知的状況について書かれた重要な学術的貢献である。以下の論文も重要な示唆を与えてくれる。Jean Jehasse, «Guez de Balzac et Corneille face au mythe romain», in *Pierre Corneille* (1985)。

### (2) 歴史悲劇の受容

16 世紀の人文主義悲劇の受容層と比較した場合、17 世紀の悲劇の観客層はより幅広いものになっている。歴史悲劇を理解するために必要な知識はどのような形で教養人層に普及していたのか—この問いに対しては Roger Zuber の博士論文 *Les «Belles infideles» et la formation du gout classique* (1968) が考察の手がかりを与えてくれる。

### (3) 歴史悲劇の創作論

コルネイユやラシーヌなどの歴史悲劇の作者が自作を弁護する際に用いる「歴史への忠実さ」という表現の内実は、劇中の事件や登場人物の言動が教養人を対象とした歴史書にある記述と合致していることであった、というのが本研究の出発点となる仮説である。つまり、観客や読者が既に持っている知識や通念と矛盾するものが作品の中にあってはならず、歴史的事実は作品に信憑性、すなわち「真実らしさ」を与える限りにおいてフィクション中で機能を果たすわけである(アリストテレス『詩学』第 9 章)。

その一方で、コルネイユやラシーヌは創作における裁量権—歴史的事件の全体の枠組は尊重しつつ、細部には変更を加える自由—を確保しようとする。この点については次の論文が参考になる。Georges Forestier, «Theorie et pratique de l'histoire dans la tragedie classique» (1989)。この「事実と虚構の配合」の問題については、小説の分野でも議論の対

象になっていたことに着目すべきだと思われる。とくに以下の小説論が研究の対象となる。Georges et Madeleine de Scudery, «Preface» *d'Ibrahim* (1641); Segrais, «Prologue» *des Nouvelles francaises* (1657); Madeleine de Scudery, «De la maniere d'inventer une fable» (dans *Clelie*, 1658); Huet, *Traite de l'origine des romans* (1670)。また、以下の研究書が 17 世紀における小説論の流れと歴史小説のジャンルとしての特徴を理解する上で参考となる。Camille Esmein (ed.), *Poetiques du roman* (2004); Christian Zonta, *La Nouvelle historique en France a l'age classique (1657-1703)* (2007)。

## 2. 研究の目的

本研究においては、コルネイユやラシーヌに代表される 17 世紀フランスの歴史悲劇を対象として、その創作の原理と実際、さらに受容のあり方について総合的な考察を行う。人文主義的歴史観、とくに古代ローマ史が悲劇の主題として重視されるに至る文化的文脈をふまえ、歴史的教養を前提とした悲劇が創作された文学的背景を明らかにするとともに、「フィクションと歴史的事実の混交」という問題が同時代においていかに論じられたか、悲劇と他のジャンルとの比較を通して考察する。

16 世紀の人文主義により復活し、後に「フランス古典悲劇」*la tragedie classique francaise* と称されることになるジャンルが確立する過程(1630 年代～1670 年代)において、ギリシア神話だけでなく、歴史(とくに古代ローマ史)に取材した劇がレパートリーの重要な部分を構成しているのはなぜか—このような問いを出発点として、(1) 人文主義の歴史観と(2) 歴史悲劇の受容、そして(3) 歴史悲劇の創作論とがどのように関連しているのかを解明するのが本研究の目的である。

(1) 17 世紀の劇作家たちが典拠とした古代の歴史書の翻訳、概説書、提要の類について文献調査を行い、悲劇の観客であった当時の教養層がアクセスすることのできた知識の源を可能な限り特定する。

(2) バルザックが 1630 年代に発表した一連のローマ人論に着目し、ストア派の立場からの古代ローマへの関心がコルネイユの歴史悲劇の知的土壌を準備したのではないかと、という仮説を検証し、具体的な影響関係を論じる。

(3) スキュデリーに代表される「英雄小説」*le roman heroique* の「詩学」—フィクションに史実を混交させることにより、読者に「嘘」を信じさせることができる、という考え方。つまり「歴史」は「見せかけの真実」として利用されるにすぎない—を悲劇ジャンルにおける議論と関連させて考察することにより、「古典悲劇」と「歴史小説」*la nouvelle historique* というジャンルの成立期に「歴史

的教養」が果たした役割を検証する。

### 3. 研究の方法

人文主義的歴史観と17世紀フランスにおける歴史悲劇の確立を関連づけて考察するために、(1) 当時の観客や読者がもっていた歴史的教養がどのように得られたものか、という点について文献調査を行う。その一方で、(2) 17世紀の歴史悲劇の知的土壌を準備したと思われる文人や作家の影響についても文献に基づき検証する。また、創作に関わる諸問題として、(3) 小説における歴史とフィクションの混交、(4) 悲劇と歴史小説に共通するモラリスト的傾向、について考察する。

#### (1) 歴史的知識の提供

17世紀フランス悲劇の聴衆や読者に作品理解の前提となる歴史的知識を提供していたと考えられる書物(古代の歴史書の翻訳、概説書、提要の類)について書誌を作成し、作品に利用された箇所などについても調査を行う。

#### (2) ローマ悲劇の知的背景

ゲ・ド・バルザックが1630年代に展開した一連の「ローマ人論」(*Œuvres diverses* [1644], ed. Roger Zuber [1995] 所収)や歴史論(«*De l'utilite de l'histoire*», dans *Entretiens* [1657])、さらには残された書簡をくわしく検討する。とくに『ル・シッド』論争から『オラス』、『シンナ』に至る過程で、コルネイユが悲劇の主題としてローマ史を選択することにバルザックが影響を与えた点について検証を行う。

#### (3) フィクションと歴史

スキュデリー兄妹による小説論において「歴史」がどのように位置づけられているのか、という問いから出発し、「英雄小説」から「歴史小説」にいたる17世紀の小説論をたどりながら、フィクションと歴史の関係についての理論の展開を跡づける。

#### (4) 悲劇と歴史小説

1660年代以降の悲劇と歴史小説の共通点として、人物の内面を精密に分析するモラリスト的傾向に着目する。とくに、フランス歴史小説の最初の成功作である『ドン・カルロス』の作者サン＝レアルの著した歴史論『歴史の用途』を取り上げ、同時期に書かれたラシーヌの一連の歴史悲劇における主要人物の心理描写の例との比較・考察を行う。

### 4. 研究成果

(1) 人文主義が一般読者にもたらす恩恵としての翻訳や祖述書—近代フランス語散文の形成にも影響を与えたとされるアミヨ訳プルタルコス『対比列伝』(1559)の他、コエフトー著『ローマ史』(1621)、ペロ・ダブランクール訳『タキトゥス作品集』(1650-51)—など、古典古代の作品を俗語、すなわちフランス語で享受することのできる環境が、フランス17世紀の悲劇作品の受

容の条件である歴史的教養を形成する素地となっていたことを明らかにした。その上で、悲劇作家が自作の擁護のために主張する「歴史への忠実さ」というトポスが、観客や読者の有する予備知識と作品の主題(=荒筋)との合致を意味するものであったこと、悲劇作家がこの「通念」を十分に意識して創作していたことを明らかにした。

(2) 従来アリストテレス詩学の枠内で論じられてきた「真実らしさ」という概念を17世紀の小説と関係づけて考察することにより、フィクションと歴史の関係についてジャンルの違いを超えた共通の関心が存在し、創作に関わるレベルで重要な議論が展開されていたことを示した。

とくに、小説における「歴史とフィクションの混交」という問題に着目し、17世紀における小説論と悲劇論とを比較することにより、両ジャンル間の相互影響関係を明らかにした。スキュデリーに代表される英雄小説の「詩学」においては、フィクションに史実を混交させることにより、読者に「嘘」を信じさせることができる、と考えられている。ここで「歴史」は「見せかけの真実」として利用されるにすぎない。この考えを悲劇ジャンルにおける議論と関連させて考察することにより、古典悲劇と歴史小説というジャンルの成立期に「歴史的教養」が果たした役割を検証した。

さらに、17世紀における「ロマネスク」悲劇と歴史悲劇の位相の違いを、小説の創作理論と関連づけて考察することにより、より広い文化的文脈において説明することができた。つまり、フィリップ・キノーに代表される「ロマネスク」な(「真実らしさ」のない)悲劇とコルネイユやラシーヌの歴史悲劇の差異は、1650年代までの「英雄小説」と1670年代以降の「歴史小説」の性質の違いと比較しうること、そして口実として用いられる「歴史」と真実らしい(信憑性のある)「歴史」との違いとは、文学的・歴史的典拠への忠実さの度合い、つまり作家および観客や読者がもつ人文主義的教養の程度によるものであること、を明らかにした。

(3) 1660年代以降の悲劇と歴史小説の共通点として、人物の内面を精密に分析する「モラリスト的」傾向を指摘した。とくに、歴史小説『ドン・カルロス』の作者サン＝レアルの著書『歴史の用途』(1671)における主張—歴史家は人間の心を解剖し、その複雑なメカニズムを明らかにする存在である—とラシーヌの一連の歴史悲劇(『ブリタニクス』[1669]、『ベレニス』[1670]、『バジャゼ』[1672]、『ミトリダート』[1673])における主要人物の克明かつ繊細な心理描写の実践に明らかな呼応関係があることを指摘した上で、歴史のモラリスト的解釈が重視された背景—「繊細の精神」の優位、大文字の歴史ではなく、「私的」な歴史への関心の増大—とその文学作品への影響について考察を行

った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①Katsuya Nagamori, « Tristan L'Hermite au Japon », *Cahiers Tristan L'Hermite*, 37, 2015, 50-52.

②Katsuya Nagamori, « Confidants et conseillers du roi dans la tragedie du XVIIe siecle », *Actes de colloques et journees d'etude (ISSN 1775-4054)*, Ceredi, Universite de Rouen, XV, 2016. (印刷中)

[学会発表] (計 4 件)

①永盛克也、「フランス 17 世紀演劇研究の現在」、ロマンス語文献学研究会、2014 年 3 月 19 日、同志社大学

②Katsuya Nagamori, « Confidants et conseillers du roi dans la tragedie du XVIIe siecle », *Colloque pluridisciplinaire Dramaturgie du conseil et de la deliberation*, Universite de Rouen, フランス、2015 年 3 月 17 日

③永盛克也、「フランスにおける文芸共和国—モンテーニュからヴォルテールまで」、京都大学大学院文学研究科・文学部公開シンポジウム「ヨーロッパの文芸共和国—わたしたちにとっての遺産」、京都大学、2015 年 12 月 12 日

④Katsuya Nagamori, « Les fonctions du recit dans la tragedie et dans le no », conference a l'Universite de Lorraine, フランス、2016 年 3 月 23 日

[図書] (計 1 件)

①Katsuya Nagamori 他, *Comment la fiction fait histoire. Emprunts, echanges, croisements*, ed. Noriko Taguchi, Paris, Honore Champion, 2015, 23-37.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

永盛 克也 (NAGAMORI, Katsuya)  
京都大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号 : 1 0 3 2 4 7 1 6

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし